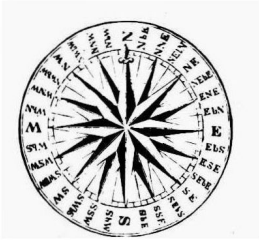
朝焼けのピンネシリ

川村たかし

——新十津川物語 5



偕成社の創作文学

朝焼けのピンネシリ
——新十津川物語　5

NDC 913　　偕成社　260p　21cm　1983年

発　行　1983年6月　初版第1刷

著　者　川村たかし
発行者　今村　廣

発行所　株式会社　偕成社
〒162 東京都新宿区市ケ谷砂土原町3の5
電話　(03)260—3221 振替 東京 5-1352番
印　刷　新興印刷・小宮山印刷／製　本　文勇堂製本

ISBN4-03-720480-0
©川村たかし　鴇田 幹　1983

Printed in Japan　落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

朝焼けのピンネシリ

——新十津川物語　5

川村たかし著／鴇田　幹絵

偕成社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

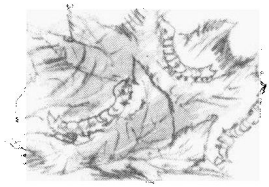
財団法人日本科学協会

朝焼けのピンネシリ／もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第1章　四人の子どもたち
1　出むかえ　8
2　雪の日の花嫁　19
3　カラスのひな　29
4　すもう野球　39
第2章　春のいのち
1　新しいいのち　48
2　春くる魚　59
3　神田神保町　68
4　平作のたのみ　76
第3章　大正九年旅だち
1　にがい酒　88
2　余市からの便り　97
3　ハンミョウ道しるべ　107
4　下品な病気　116
第4章　ゆるやかな時ながれて

1 小さな秘密 126
2 ふたりの盗人 138
3 一宿一煙 149
4 小さなあずけもの 158
第5章 ときめきの再会
1 雨の祭り 169
2 招かざる客 180
3 兵隊さん 190
4 山すその家へ 199
第6章 もえる東京
1 都落ち 209
2 海鳴り地鳴り 217
3 赤い月 233
4 あわだたしい旅 244
あとがき 255
信頼の絆〈解説〉＝横川寿美子



著者・**川村たかし**（かわむら たかし）
1931年，奈良県に生まれる。奈良教育大学卒。現在，梅花女子大学助教授。日本児童文学者協会・日本児童文芸家協会会員。主な作品に『川に立つ城』『凍った猟銃』『熊野海賊』『山へいく牛』（国際アンデルセン賞優良作品賞・野間児童文芸賞）『北へいく旅人たち』『広野の旅人たち』『石狩に立つ虹』（路傍の石文学賞）『昼と夜のあいだ』（日本児童文学者協会賞）など多数。住所／奈良県五条市新町2－1－14

画家・**鴇田　幹**（ときた かん）
1932年，千葉市に生まれる。1959年より田代素魁氏に師事。日本グラフィックデザイナー協会・白礫会会員。雑誌・図書のさし絵に活躍し，児童図書に『北へ行く旅人たち』『広野の旅人たち』『石狩に立つ虹』『北風にゆれる村』『高杉晋作』等がある。住所／千葉市南生実町861

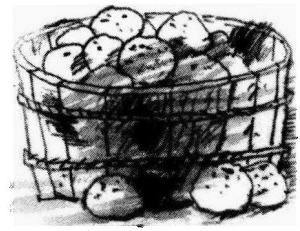
川村たかし

朝焼けのピンネシリ——

新十津川物語 5

第１章

四人の子どもたち



１　出むかえ

「陸軍の」「乃木さんが」「がいせんす」「スズメ」「メジロ」「ロシヤ」「野蛮国」「クロパトキン」

ふたりの男の子がたいくつまぎれにしりとりをはじめた。待合室には、あかあかとストーブがもえ、十人ばかりの客が列車をまっている。旭川へいく下り列車はもう一時間以上もおくれていた。外はどっぷりと雪がふかく、きょうもちーんとしばれがきつい。打ちつけた長いすに足をぶらぶらさせたふたりが、

「クロパトキン」「きんたま」「まぬけ」「けちんぼ」「ぼんやり」「陸軍の、乃木さんが……」

はじめにもどって、目のまるいほうがくりかえそうとすると、すみのほうにすわっていた男が声をかけた。

「きみ、そこんところがちがうようだが。」

軍服こそ着ていないが、男はどうやら軍人らしかった。まっすぐ背なかを立て、ふといまゆの下で、とび色の目がわらっている。

「クロパトキンのつぎだがね。おじさんが知っているのは、きんたま――マカノフ――ふんどし――しめた――高ジャッポン――ポン上がり――陸軍の……と、はじめにもどっていく。」

「マカノフとはなにかいの。」

「ロシアの将軍だ。クロパトキンも将軍だ。高ジャッポンというのは山高帽子のことでね、フランス語では帽子のことをシャポーというもんだから、かってにかえたんだろう。」

横にいるもうひとりの少年が、まっすぐに男を見あげた。こちらはひたいがひろかった。

「おじさん、ロシアはつよかったの？、それともよわかったの。」

男はおどろいたようにむきなおった。

「つよかったとも。で、きみたちは兄弟かね。」

「うん。おれが弟。こっちが一つ上の六年生。東京からかえる兄ちゃんをむかえにきたんだわ。」

目のまるいほうが答えた。辰太郎だった。六年生というのは豊彦のことで、ふたりは庄作をむかえに滝川の駅にきていた。庄作はあやの結婚式のために、まもなく東京からかえってくる。

「おそいの。」

しりとりの腰を折られた辰太郎は、窓の外をながめた。どんよりくもった空の下を、風が音もなく走っていた。電線がかすかにゆれるだけで、汽車がくる気配はまるでなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正三年にはじまった世界大戦は日本に異常な好景気をもたらした。ドイツの潜水艦は無警告に外国船をしずめてまわる。そのため世界じゅうに船がたりなくなり、船賃はどんどんあがっていった。

戦前、トンあたり五十シリングだったイギリス航路では、大正六年のおわりには、四百五十五シリングと九倍にもあがったし、日本でも、門司と横浜の石炭運賃は六十銭が八円五十銭にもあがった。じつに十三倍をこえたことになる。

北海道の農家もにわかに金まわりがよくなった。豆類や馬鈴薯の値段がはねあがったせいだ。青エンドウ・ウズラ豆・金時豆などは八倍もの値がついた。

大正二年の冷害で借りた金は一、二年のうちにきれいになり、年とともに見たこともない大金がころがりこんだ。

札幌のある男は大金のしまい場所にこまって、札たばをふくろにぬいこんだが、家においておくのが心配で、出かけるときはかついで歩く。子どもが学校を休んでついて歩いた。

べつの男は大金のしまい場所にこまりはて、銀行があくまでのあいだストーブにかくしておいた。朝になってなにも知らない妻が火をつけ、石炭を投げこんだ。気づいたときはもうどうしようもなかった。腹をたてた男は女を俵につめこみ、わめきながら道路をひきずって歩いた。

また、ちがう男は妻にないしょで札たばをだいてふとんにもぐりこんだものの、不安でならない。強盗におそわれないよい思案はないものか。するとふと妙案を思いついた。ポストなら朝ま

で安全だろう。彼は深夜の町をさまよい、持ってきた札たばをつぎつぎとポストにおとしこんだまではよかったが、いつ郵便さんがくるかわからない。しかたなく寒さにふるえながら夜明けをまったという。

札幌の今井百貨店が石づくりの三階の店を新築し、五番館は自動車を買いいれた。五円以上の買い物客を家までおくりとどけるためである。

豆成金、でんぷん(馬鈴薯)成金、大根成金が、いたるところに生まれた。積みだし港の小樽には、貿易商がぞくぞくと支店をだし、いせいのよい前だれすがたの店員が町にあふれている。かたみのせまい安サラリーマンは職場にきて、そっと制服のはかまに着かえた。

あらゆる物がつられて値をあげていた。年平均三十二パーセントというインフレーションだから、農家とは反対に、給料とりの生活は苦しくなるばかりだった。

巡査の場合、月給二十円をとるのは全北海道で二十四人しかいなかった。年にいちど五十銭あがることになっているものの、それだけではどうにもならない。一升十五銭だった米は五十銭をこえた。大正五年と六年だけで、全体の四十六パーセントがやめていった。

先生になる者も、このごろではへったし、道議会では、

「ちかごろ師範学校の生徒は全員が栄養不良で、なっぱ色になっている。」

と、とりあげたほどである。

なべ焼きうどんの内職をする教員もいる。一ぱい十五銭のうどんで、もうけは四銭五厘になっ

た。やっと二十ぱいを売って、つぎの朝はなにくわぬ顔で出勤した。
質屋は大はんじょうし、それでもおっつかない安サラリーマンの腰からは、弁当箱さえも消えていった。〈腰弁〉が消えるということは、昼食ぬきで仕事をすることをあらわしていた。
各地でストライキがおこった。大正六年六月、室蘭の日本製鋼所は一週間けむりをとめた。三千人が賃上げを要求して、職場をはなれたのだ。注文を受けていた大砲七十門がまにあわなくても、職工たちはたじろがなかった。それほど生活に追われていた。
だが、いっぽうでは日本郵船のように、支店長のボーナスが月給の五十五か月分というのもある。戦争の好景気はむごたらしいひずみをひろげていたといえる。

とおくからかすかに汽笛の音がきこえると、待合室の人びとはのろのろと立ちあがった。汽車は二時間ちかくおくれていた。
「やっときたかのら。」
辰太郎は線路に出てみた。うずたかい雪山のかげに、列車はしだいにふくれあがってくる。
「のっとるかの。」
辰太郎は足ぶみした。外へ出ると、たちまちつまさきがひえた。
「なあ豊ちゃん。」
豊彦はちょっと首をかたむけたが、

「うん。」
と、だけ答えた。ふだんから口かずのすくない兄だから、辰太郎はわけもなくことばにつまってしまう。ふたりの背たけはほとんどかわらなかった。血はつながっていないはずなのに、豊彦のほうがフキと似ているところがあった。その顔をふりかえりながら、
「大きい兄ちゃんはみやげを買うてくるかの。」
中崎庄作が東京へ出たのは、去年の春のことである。村の郵便局で一年半つとめたのち、十八円の貯金通帳だけをふところに、ひとり上京していった。
フキはとめなかった。勉強したいといわれれば、もっともなことだと思った。大和の十津川で山津波にあってから、フキに家はない。ご先祖さまからつたわる土地や家ははじめからなかった。子どもたちはさやの中の豆がはじけるように、てんでにとびだしていき、それぞれの大地に根をおろす。それでよいではないか。長男の庄作でも、むりやり百姓をつがそうとは思っていなかった。
あっさりゆるしてもらうと、かえって庄作のほうがあわてた。あまりにそっけないのが不安でもあった。
「札幌の通信学校でおそわった先生が、逓信省（いまの郵政省）に世話してくれるんじゃ。ほいで、おれは夜間大学で勉強する。心配せんでええって。」
「心配などせん。おまえのことや、なんとかじぶんでじぶんの絵をかくつろ。」

フキはわらいながら、身のまわりの物を柳行李につめてやった。

一年がすぎた。

あやの結婚式があしたにせまっていた。函館を立つとき電報がきて、ふたりの弟は馬そりをしたててむかえにきていたのである。もうフキとあやのふたりは吉野へ出発している。この列車にのっていなければ、庄作はまにあわないだろう。

大正七年のこの年、去年のおわりからとりわけ寒さがきびしかった。裏日本でも吹雪がつづいて、いたるところで汽車はうごけなくなった。豪雪のために孤立する村がおおいという。おなじように北海道でも、正月のはじめから毎日のように吹雪いた。村の南部はとくにはげしく、何日も交通がとだえた。郵便も新聞もとどかず、家いえは雪の下にうもれた。

二月がすぎ、三月の下旬になっても雪はふかい。きのうも一日じゅう粉雪が舞ったせいで、鉄道は混乱しているらしかった。

ヒィッー

と、悲鳴のような汽笛がきこえ、列車がすべりこんでくる。

「あぶないぞ、下がって下がって。」

駅長がけわしい声で小旗をふった。足もとがこおっているせいだ。名ばかりのプラットホームに足をとられると、かんたんに車輪にまきこまれそうだった。

どなられながらも、着ぶくれた人びとはクマのように、のそりと立っていた。そのまえを黒ぐ

ろと列車がふさいでいく。

「じゃあきみたち、気をつけてな。」

さっきの男が豊彦の肩に、大きな手をおいた。よくひびく声が頭の上できこえた。

「それが……」

おりてこないのである。五、六人の乗客が白い息をはきながら、改札口へむかっていく。

「おらんがのら。」

豊彦がもういちど目をこらしたときだった。列車の後部から、ひょいと荷物がころがり出、つづいて黒いマントがひるがえった。庄作だった。

「いたようだね。それじゃ。」

男はわらいながらのりこんでいく。豊彦はわけもなく、そのうしろすがたを見おくっていた。手がのっていた肩のあたりがかすかにあたたかかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com